

望ましい人間関係づくりのための援助に関する研究

—「Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)」の研修を通して—

鳥居 登志子

学級集団内で「望ましい人間関係づくり」をより効果的にすすめるために、Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)の実施が、有効な手立ての一つとなることが、昨年度の研修講座アンケートから明らかになった。また、Q-Uの認知度や、基本的な考え方の理解、集計分析の技能、活用の仕方については、経験による個人差が大きく、「必要だと考えているが、一人で学ぶのは難しい」と感じている教員が多いことも明らかとなった。そこで本研究では、Q-Uについての様々な形態での研修を提供し、どのような効果が得られるのかを探ることにした。特に各学校への要請訪問研修での支援は、学校からのニーズに合わせた研修を提供でき、満足度も高く、今後ますます望まれる支援となることが分かった。

<キーワード> Q-U、研修講座、要請訪問研修、チーム支援、同僚性

I 主題設定の理由

1 「Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)」導入の背景

子どもたちは学級集団に馴染めなかつたり、不登校になったりする前に、様々なサインを出し始めると言われている。そのサインがわかりやすいものであったり、周囲の人々が早めに気付くことができれば、適切な対応をとることができ、人間関係を望ましいものに修復することができる。しかし、様々な要因から、そのサインが分かりにくかつたり、周囲の人々が気付くことができなかつたりすると、子どもの気持ちをきちんと受けとめることが難しい場合がある。こうした場合、適切な対応はとられないことがなく、その集団内の人間関係は崩れ、いごちの悪い集団となり、やがては、不登校や学級崩壊へつながる可能性が生じてくる。

そこで、積極的に子どもたちの内面を探ることが必要になってくる。しかし、子どもたちの内面を探ることは容易ではなく、従来行ってきた教員の観察や児童・生徒の作品評価などからでは、子どもが発するサインの個人差や受け手である教員の思い込みなどが影響して、必ずしも客観的なものになり得ない。こうした背景から、児童・生徒理解および学級集団理解の有効な手立ての一つとして、「Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)」の活用に着目した。

2 平成20年度研修講座のアンケート結果から

平成20年度、本教育研究所教育相談課の研修講座「学級集団理解のためのQ-U」では、受講者から高い満足度が得られた(図1)。また、多くの受講者が、「Q-Uは学級集団理解に役立てることができる」と考えていることがわかった(図2)。受講後の感想からも「今までどのように利用してよいのかわからず、やりっ放しだったが、Q-Uのよさがわかった」「集団作りが大切だとわかった」や「Q-Uの結果が戻ってくるので学級経営に役立てたい」といった声が多く聞かれた。

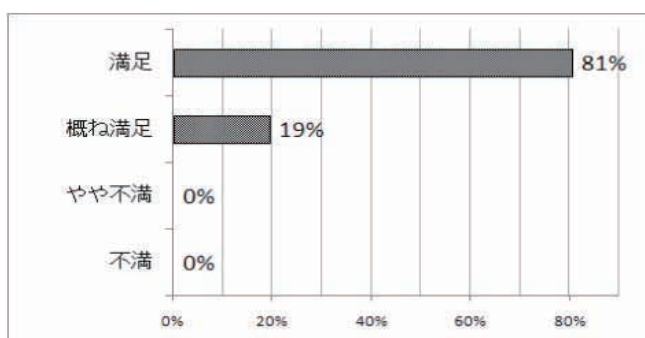


図1 平成20年度「学級集団理解のためのQ-U」研修講座の満足度 (n=36)

このアンケートの結果や感想から、教員は子どもたちの内面を探ることが必要であると考え、しかもできるだけ客観的に理解する方法を学びたいと考えていることが分かる。

しかしその一方で、Q-Uの研修内容については「概ね理解できた」が「よく理解できた」を大きく上回る結果となった(図3)。

研修後のアンケートから、「初めての人には難しく、実際に何度もやってみる必要があると感じた」「もっと基本的な説明からしてほしい」「プロット図の読み取りが難しい」「アセスメントの大切さは分かったが、自信がもてない」「事例が変わると対応も変わるので、もっとたくさんの事例を勉強したい」「勤務校の先生達とグループで研修したい」「学校全体で取り組むために校内研修に来て教えてほしい」などの声が多く聞かれた。Q-Uの活用に関する内容が、Q-Uを実施したことがない受講者にとって難しかったのではないかと考えられる。

これらのことから、Q-Uが学級集団を客観的に理解するために有効な手立ての一つであることはよく理解されたが、基本的な考え方の理解や集計分析の技能、活用の仕方については、個人差が大きいのではないかと考えられる。そのため、Q-Uを何度か実施したことがある受講者からはより理解が深まったと満足度が高い一方、初めて実施しようとしている受講者、または実施したことがない受講者にとっては、「理解できないわけではないが難しい」という2つのタイプが存在していることが推測できる。

このような状況から、Q-Uについて研修講座と訪問研修を通して支援していくことが必要ではないかと考え、本研究主題を設定した。

II 研究の目的

「Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)」の研修を通して、教職員の現状や課題を把握するとともに、児童・生徒および学級集団の理解を深め「望ましい人間関係づくり」の効果的な援助の方法を探る。

III 研究の方法

1 調査対象者

- (1) 平成21年度研修講座受講者(小学校 18名、中学校 8名、高等学校 12名、計38名)
- (2) 平成21年度要請訪問研修受講者(小学校 5校 65名、中学校 3校 48名、計113名)

2 調査方法

教育研究所での研修講座と各学校での要請訪問で研修を行い、研修後、受講者にアンケートおよび聞き取りによる調査を実施し、集計結果を分析・考察する。

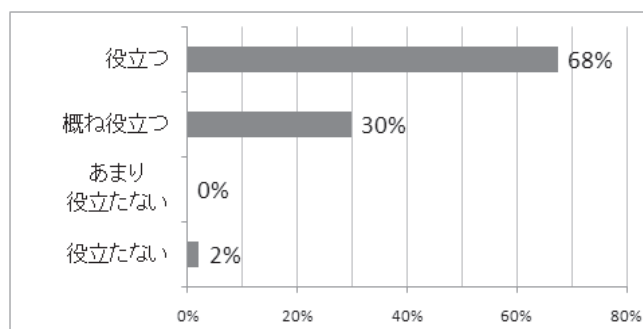


図2 学級集団理解への役立ち度 (n=36)

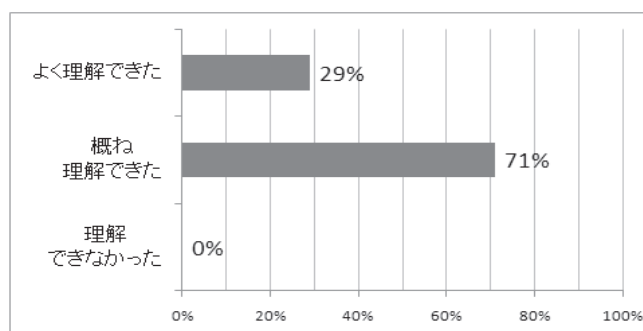


図3 研修内容の理解度 (n=36)

(1) 教育研究所での研修講座

平成20年度の受講者アンケート結果をふまえ、今年度は、受講者のニーズに合わせ、研修講座の内容を「入門」と「活用」の2つのレベルに分けた。

6月に行われた「わかるQ-U(入門)」の受講者に対して、

- ・ Q-Uとはどのようなものであるか
- ・ 実施後の集計方法
- ・ データの基本的な分析の仕方や個別・集団のとらえ方
- ・ 架空学級の事例検討会の開き方

について研修した。研修講座終了後、アンケートを実施し、満足度や課題を探った。



図4 教育研究所での研修講座の様子

(2) 各学校への要請訪問研修

今年度初めてQ-Uを実施した学校や、Q-Uを実施したことはあるが結果をどう活用したらよいかわからないと悩んでいる教員からの依頼を受け、教育相談課員が当該学校を訪問する要請訪問研修を行った。研修形態は、その学校の要望に合わせ、学校単位、学年単位、学級単位といった、3つの形式で行った。

① 学校単位での研修(講義・演習中心)

今年度初めてQ-Uを実施した学校や、Q-U未経験者の多い学校では、全教職員一斉で研修を行った。6月に教育研究所で行った「わかるQ-U(入門)」研修講座と同じ内容を研修した後、抽出学級のデータを使って、実際に分析し事例検討会で今後の対応について話し合う研修を行った。また研修後、受講者全員にアンケートおよび聞き取りを実施し、満足度や課題を探った。



図5 要請訪問研修(学校単位)

② 学年単位での研修(スーパーバイズ中心)

今までにQ-Uを実施したことがあり、結果の分析や事例検討会などの経験がある学校については、学校からのニーズに合わせて、いろいろな形で要請訪問研修を行った。例えば、各学年に一人ずつ教育相談課員を配置し、抽出クラスについて結果を分析し、事例検討会で話し合うという研修を行った学校や、学年全クラスについて教育相談課員が結果を分析し、学年担当教員全員がスーパーバイズを受けるといった研修を行った学校などがあつた。各学年での研修後、受講者にアンケートおよび聞き取りを実施し、満足度や課題を探った。

③ 学級単位での研修(コンサルテーション中心)

今年度Q-Uを実施したが、校内研修や学年会がもてなかつた学校もあつた。その中で、希望があつた場合、学級単位での研修を行った。担任の他に教科担任や養護教諭も加わり、その学級についてコンサルテーションを行った。個別研修の後、受講者にアンケートおよび聞き取りを実施し、満足度や課題を探った。

IV 研究の結果と考察

1 教育研究所での研修講座

研修講座「わかるQ-U(入門)」アンケート結果より

今年度の受講者は、「初めてQ-Uを実施してみた」または、「実施したことはないがどのようなものか学びたい」といった小・中・高の教職員が対象であつた。

この講座では、Q-Uの考え方や実施についての講義と、実際にQ-Uを体験しながら、集計の仕方やプロフィール・プロット図の作成、基本的な分析、事例検討会のもち方について研修した。半日という短い時間で講義と演習を行った上に、小・中・高の教員が混在していたにもかかわらず、「研修内容に満足したか」の問いに対して、「満足」64%「概ね満足」36%と高い満足度を示した（図6）。また、「研修内容は今後の指導や実践に役に立つか」の問いに対して、「役に立つ」55%「概ね役に立つ」45%と受講者全員から肯定的な解答を得た（図7）。研修に関する受講者の感想は、次の通りである。

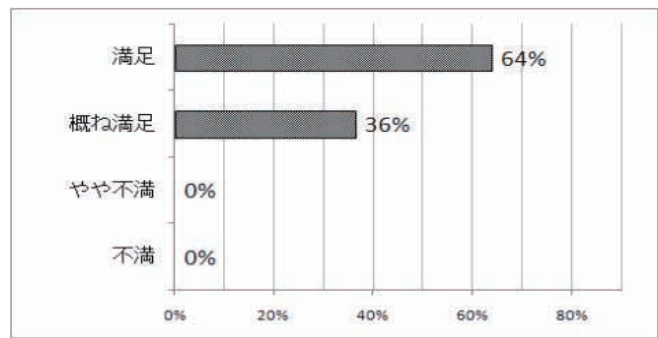


図6 研修の満足度 (n=33)

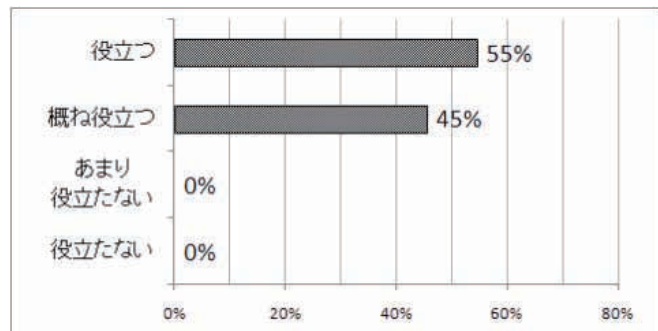


図7 研修の役立ち度 (n=33)

- ・ Q-Uを実際に体験でき、使い方がよくわかった。
- ・ Q-Uとはどんなものか理解でき、子どもの内面を探るよい手立てだとわかった。
- ・ クラスで抱えていた問題がQ-Uで納得できた。
- ・ 集計結果の分析が役に立ちそうだと思う。
- ・ 今回の事例検討会は、内容が理解しやすくやりやすかった。
- ・ 事例検討会をすることで、具体的な対応策が出てくることが実感できた。
- ・ プロット図を見て、新しい視点で子どもを見ることができるようになった。
- ・ 教職員の連携(チーム支援)の大切さを改めて感じた。 など

これらの研修アンケートや感想から、教育研究所での研修講座は、Q-Uについて理解したり、Q-Uを「望ましい人間関係づくり」に活用したりするのに、有効であると考えられる。特に今年度のように、研修講座を「入門」と「活用」に分けたことにより、講座内容を絞り込み、Q-U経験の浅い受講者のニーズにも、より適切に応えることができたのではないと思われる。さらにまた、

- ・ 外部講師を招いて校内研修を開きたい。
- ・ 校種別の事例で研修したい。
- ・ 自分の学級のデータを教育相談課へ持って行き、アドバイスしてほしい。
- ・ 基本的なとらえ方は理解できたが、外れたプロット位置の子どもの見方や対応がわからない。

などの意見もあり、Q-Uをやってみたい、研修するなら架空データでなく自分の学校のデータで研修したいという教員の前向きな意欲が窺えた。しかし、それと同時に教育研究所の研修講座を受講する時間がとれない、受講した研修内容を校内で伝達する時間がとれない、研修を受けたが結果の分析や活用のスキルに自信がもてないといった教員の不安も見えてきている。

2 各学校への要請訪問研修

(1) 学校単位での研修(講義・演習中心)

学校単位での研修では、研修講座「わかるQ-U(入門)」のテキストを使い、研修講座より短い時間での研修だったが、研修後のアンケートの結果から、「研修内容のわかりやすさ」の項目で78%が「よく理解できた」と答えている(図8)。

これは、教育研究所の研修講座と違い、勤務校のデータを使っでの研修だったため、実際の児童・生徒の様子とプロット図やプロフィールの結果を比較でき、理解しやすかったのではないかと考えられる。

プロット図の読み取りがより具体的になったため、事例検討会でも学校の実情に合った意見が多く出された。また、ほとんどの教員が、自分の学級のデータを持ち込み、自分の学級と照らし合わせながら研修を受けたことも、理解を深めるための大きな要因だったと考えられる。

要請訪問研修に関する受講者の感想は、次の通りである。

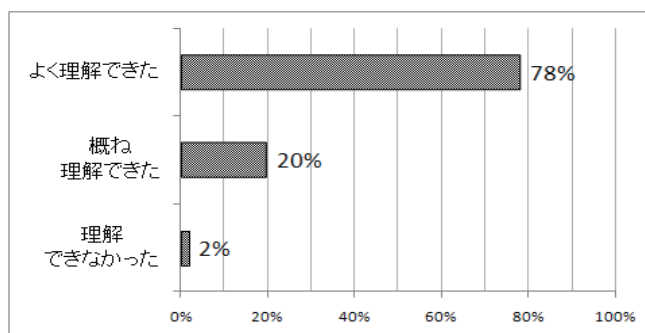


図8 研修のわかりやすさ(要請訪問)(n=106)

- ・Q-Uについては全く知らなかったが、児童の内面を理解する方法の一つとして有効であると感じた。多面的に生徒達を見ることは、今後の指導に活かそうと、とても勉強になった。
- ・今までQ-Uをやりっ放しで終わっていたが、結果が戻ってきてから、それをどのように活かしていくかが大切だとわかった。
- ・今まで、どこかの学級について、教職員みんなで話し合うことがほとんどなかった。みんなで話し合うことで、今までの自分の指導について振り返るきっかけとなってよかった。
- ・Q-Uの大切さは知っていたが、研究所の研修講座を受けに行く時間も取れない。今回のように教育相談課員が学校に来て研修をしてくれるのはありがたい。



図9 要請訪問研修での講義

これらの研修アンケートや感想から、各学校への要請訪問研修は、一度に多くの教員にQ-Uについて周知・理解を図ることに有効であると考えられる。特に、研修を受けたいが教育研究所に出張する時間がないという、忙しい学校の現状に対しての解決策の一つになるのではないと思われる。一方、受講者の感想から、「抽出学級は理解できたが、自分の学級はどう分析してよいのか、どう対応していけばよいのか自信がもてない」といった声も聞かれた。

(2) 学年単位での研修(スーパーバイズ中心)

Q-Uについて研修経験のある学校では、学年毎の研修を希望する学校がほとんどであった。Q-Uをやりっ放しでは効果がないことや、Q-Uを通してみんなで話し合うことが大切であることなどは理解されてきている。しかし、忙しい校務の中、時間が取れなかったり、自分達では研修を進めることが難しかったりする。そのため、外部講師を招き、短い時間で効率的に研修しようとする意図が窺える。

学年研修では、各学校のニーズに合わせ、抽出学級の分析と事例検討会を行う場合や、全学級に対

し教育相談課員が短時間でスーパーバイズした場合や、あるいは事例検討会と各クラスのスーパーバイズを組み合わせた場合など、様々なプログラムで研修を行った。

研修後のアンケートから、「演習(事例検討会)の感想」の項目で、「大変よかった」41%「まあまあよかった」55%「あまりよくなかった」4%となった(図10)。

「大変よかった」と答えた受講者からは、結果の見方や今後の対応についてのアドバイスに関する満足感だけでなく、学級や児童・生徒の情報を共有できたことや、学年の教員同士で話し合うことができたことについての満足感を多く挙げていた。

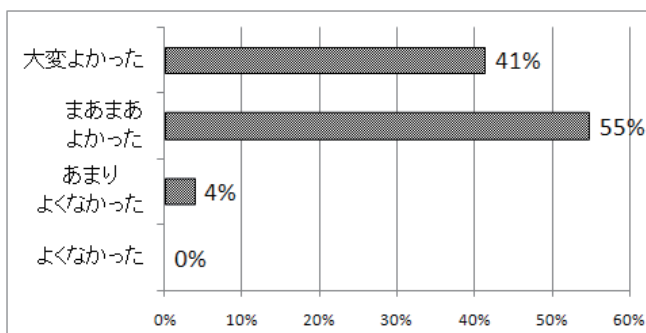


図10 演習の感想（要請訪問研修）（n=104）

要請訪問研修(学年単位)に関する受講者の感想は、次の通りである。

- ・より多くの先生方と話すことで、具体的な解決策を模索できたことがよかった。
- ・他のクラスの様子や先生の取り組みや悩みを聞くことができて勉強になった。
- ・学級で困っていることや知っていてほしい情報などを学年間で共有できたことがよかった。
- ・Q-Uを実施することで、職員がまとまるきっかけとなった。
- ・2回目の実施までに、自分がどんな支援を行い、それが学級の状態にどんな影響を与えたかもわかり、具体的な支援策を学年で話し合うことができたのもよかった。
- ・学級の個性(違い)を共通理解したことで、全体の活動(行事・集会・委員会・掃除・クラブ・学年活動)の場でも集団化するときの方向性が見えてきた。
- ・学年内の相互理解や行事の計画・立案に重要な資料になると期待できる。

また、Q-Uを2回実施した学年の研修では、1回目の研修後の取り組みを見直すきっかけとなった。例えば、1回目の研修後、ペア活動やグループ活動に取り組んだ担任が、秋頃からその効果を実感していたところ、2回目のQ-Uの結果でその効果が確かめられたという報告も聞かれた。

これらのことから、学年単位で研修することは、学年に関わる教職員全体で児童・生徒理解を深め、望ましい集団づくりに向けてのチーム対応の取り組みにつながると言えるだろう。教職員一人ひとりがもっている情報やスキルを分かち合い、チームで助け合うことで、その学校全体の同僚性を高める効果があったのではないかと考えられる。



図11 学年での事例検討会

一方、「まあまあよかった」「あまりよくなかった」と答えた受講者の感想の中には、「もう少し話し合いの時間を長く取るとよかった」「プロット図から理解するのが慣れないので、支援がほしい」「学年会の後、個別でコンサルテーションしてほしい」といったものがあった。

(3) 学級単位での研修(コンサルテーション中心)

研修講座や要請訪問研修の後に「学校や学年単位での研修も有意義だったが、自分の学級のデータも分析やスーパーバイズしてほしい」という感想も多かった。実際、研修を受けた教員に行ったアンケートの中で、「Q-Uを実施する上で困難だと思われるものは何か」の問いに対し、全員が「プロット図を読

み取る自信がない」と答えている。また、「Q-Uを実施する場合、何を望むか」の問いに対しても、全員が「個別にプロット図の読み取りや助言をしてほしい」と答えている。

そこで、学級担任の不安を軽減し、望ましい人間関係づくりをすすめるための支援の一つとして、学級単位での研修を行った。方法はできるだけ担任の負担にならないよう、教育研究所の研修講座の後であったり、要請訪問研修の後であったり、教育相談課員が学校に出向いたり、担任が教育研究所に来所したりと、できるだけ希望に添う形で行った。また、担任の希望に合わせ、コンサルテーションの回数も1回の場合と、複数回の場合があった。

要請訪問研修(学級単位)に関する受講者の感想は、次の通りである。

- ・子どもたちの状態を知る手がかりとして、Q-Uはとても有効なものだと思った。個々の様子は教員の見た目とはずいぶん違うもので、ドキッとすることが多く、よくわかった。これらの情報を活用していく具体策まで教えていただけたのがありがたかった。個々人のことのみならず、学級全体のことを知ることができてよかった。(Q-U初心者)
- ・第三者の立場から分析を聞くことで、自分の学級の全体・個別の状態を冷静に見つめ直すことができた。思った通りの結果が表れた場合でも、そこからどんな支援をしていくとよいか、話し合うことができたのが貴重でした。(Q-U初心者)
- ・担任一人ではなく、学級に関わっている先生方と共に研修したので、話し合いが深まり、情報や今後の対応など共有できてよかった。(Q-U経験者)
- ・今年は2回実施し、その都度コンサルテーションを受けたことで、児童の変容の実態をその時のクラスの様子と照らし合わせたり、教員側の指導の手立てとしたりすることができた。しかし、担任一人で結果を分析することは難しいので、今後も専門家のアドバイスを受けたい。(Q-U経験者)

担任の感想からも、望ましい学級集団づくりのためにQ-Uの活用は有効であり、担任一人で取り組むより、学級に関わる教職員のチームで取り組みたいと考えていることが窺える。先述の教員からのアンケートでは「Q-Uを実施する場合、何を望むか」の問いに対して、ほぼ全員が「外部講師を招いて、学年で事例検討会を持ちたい」と答えている。

これらのことから、「望ましい人間関係づくり」のためにQ-Uを通してチームで学級集団を理解したいと思っているが、そのために結果の分析や事例検討会などの支援を外部に望んでいる教員の姿が見えてきている。

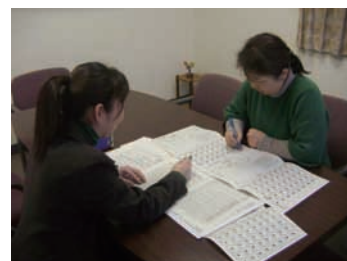


図12 コンサルテーション

3 実践例 要請訪問研修での学年事例検討会の支援

(1) 実践A (学校・教員共に初めてのQ-U実施)

対象：小学校5年生

参加者：同じ学年の担任、教科担任、特別支援教育コーディネーター、校長、教育相談課員(1名)

Q-U実施回数：2回(6月、11月)

訪問回数：2回(7月、12月)

学校からの依頼内容：

- ・Q-Uについて基本的な講義
- ・Q-U集計からのプロット図とプロフィールの作成方法
- ・Q-U結果の分析支援と学級集団づくりの支援
- ・学年会での事例検討会の支援
- ・Q-U研修講座の資料提供やQ-Uに関する文献の紹介

<支援の経過>

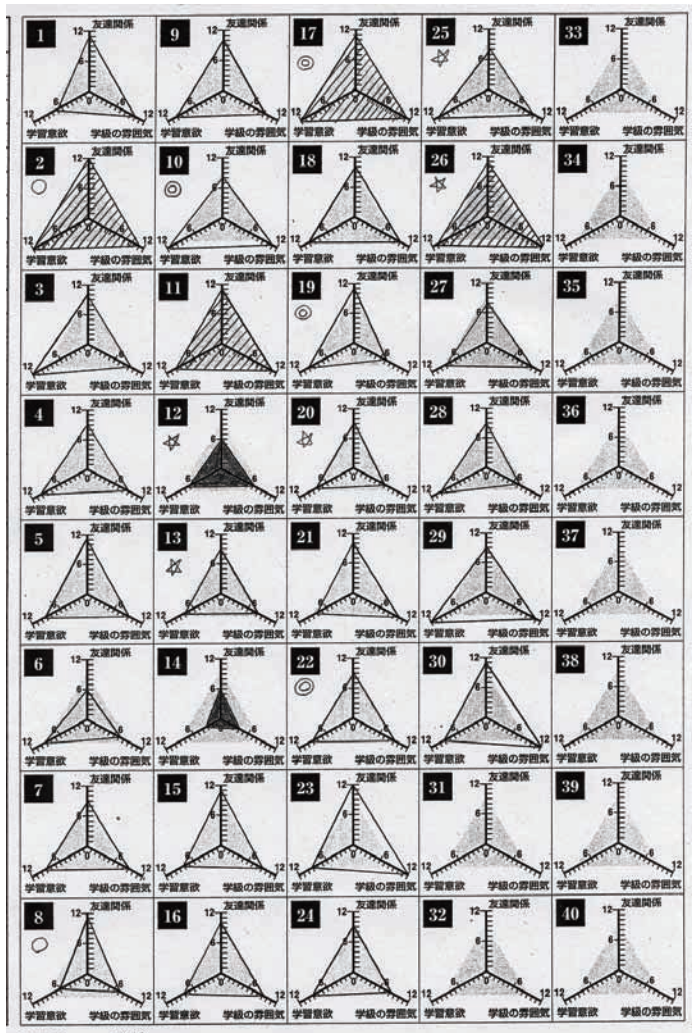
Q-Uを取り入れたいが、校内の教職員のほとんどがQ-Uについての知識がなく、教育研究所の研修講座を受講する時間もとれない現状で、Q-Uの基礎知識や集計方法や結果の分析について、短時間で具体的に支援してほしいという依頼であった。そこで、初心者にもわかりやすく短時間で少ない支援回数で具体的にQ-Uを活用できることを研修のねらいとした。

① Q-Uの1回目実施(6月)についての事例検討会<7月中に支援>

まず、研修講座のテキストを使って、Q-Uについての簡単な研修を行った。その後、アンケートを集計し、集計結果からプロット図とプロフィールを作成した。参加者から「初めての実施で、Q-Uの基本的な考え方は理解できても、プロット図やプロフィールの内容を読み取ることができない。個々の結果を追っていると全体がつかみにくくなってしまおう」という意見があった。そこで、リーダー・気がかりな子・影響力の大きい子・特に意欲の高い子・特に意欲の低い子について、プロット図とプロフィール上で色分けし、さらにグループを線で結んだ。これによって、結果の分析に慣れていない教員でも学級全体を把握しながら個々の状態もとらえやすくなった(図13、図14)。

作成した資料をもとに、学年会を開いた。まずプロット図やプロフィールのとりえ方などについて基本的な研修を行った。学級の児童個人や学級集団を理解する視点を示し、担任の日常の観察と照らし合わせた。その際に示した視点は、次の通りである。

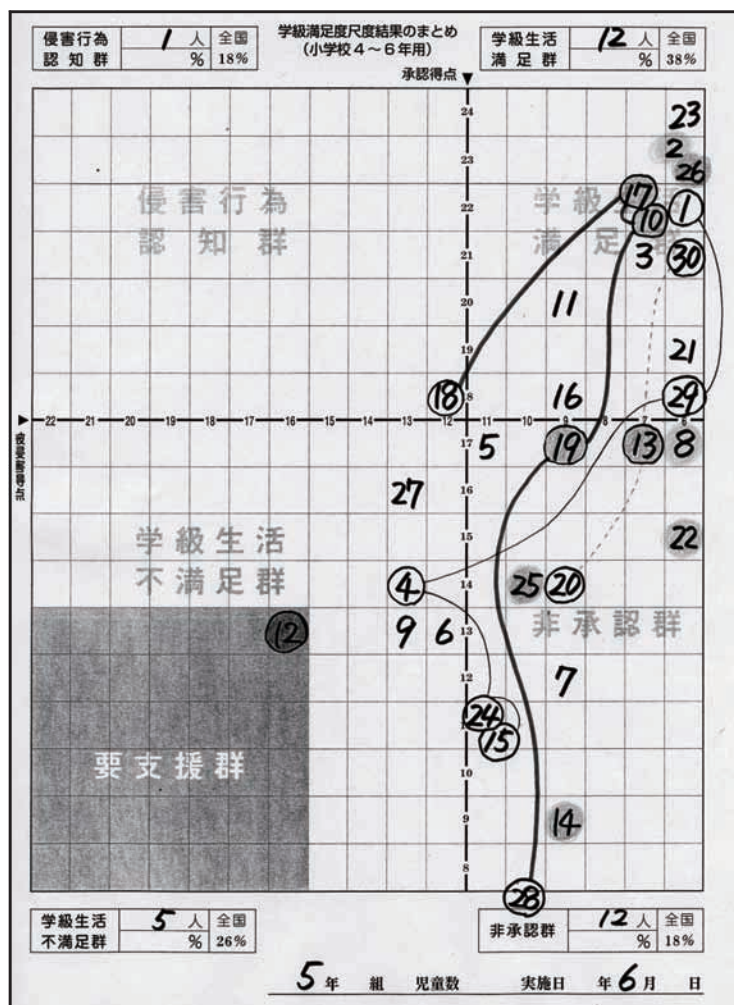
- ～プロフィールより～
- ・リーダー向きかどうか
 - ・学習支援が必要かどうか
 - ・友人関係の支援が必要かどうか
 - ・学校生活全般に支援が必要かどうか
 - ・不登校の可能性はあるかどうか



◎リーダー ○影響力が大きい子 ☆気がかりな子
 ■意欲が高い子 ■意欲が低い子

図13 集計結果から作成したプロフィール（6月）

※河村茂雄『Q-U』図書文化社より引用



- ～プロット図より～
- ・プロット全体の印象
 - ・プロットの形からみた学級のタイプ
 - ・担任から見て気がかりな子のプロット位置の確認
 - ・担任から見て意外な場所にプロットされた子がいるかどうか
 - ・気になる場所にプロットされた子についての聞き取り
 - ・学級内の評価のものさしは何か

緑：リーダー 黄色：影響力が大きい子 赤：気がかりな子

図14 集計結果から作成したプロット図（6月）※河村茂雄『Q-U』図書文化社より引用

次に、担任から見て気がかりなことや困っていること、うまくいっていることなどについて報告してもらった。また、担任以外の教員からも、事例提供の学級集団および学級内の児童について、授業や学校行事、さらには休み時間や清掃時などにおける様子について情報や所見(リソース)を提供してもらった。その後、教育相談課員が今後の学級集団への対応について、以下のような視点を示し、それらを踏まえながら、参加者全員で、具体的に誰が、どんな場面で、どのように取り組んでいくとよいか話し合った。

- ～今後の対応について～
- ・ルールとリレーションのどちらの指導に力を入れるか
 - ・教師主導か子ども主体か
 - ・各群の児童に対しての働きかけのポイント
 - ・活動グループの人数、構成、時間
 - ・構成的グループエンカウンター、集団ゲーム、イベントなどの実施について

1回目の学年事例検討会後、9月～11月の約3ヶ月間担任が取り組んでみたことは、次の通りである。

～具体的に取り組んでみたこと～

- ・行事でのクラス全体の様子を、Q-Uの結果を踏まえながら観察した。
- ・活動にゲーム的要素を加え、楽しく取り組めるような学級活動を取り入れた。
- ・少人数の話し合い活動を多く取り入れた。
- ・グループの組み方(人数・メンバー・活動場面)を工夫した。
- ・承認得点の低い児童には机間巡視を増やし、わずかな進歩でもほめたり、粘り強く励ましたりした。
- ・「～しない」「だめ」といった否定形の表現でなく、「～したら～できる」のような前向きな表現をするよう気をつけた。
- ・係活動では一人一役を取り入れた。
- ・お楽しみ会を設け、グループでの出し物や係を分担し受け持たせた。
- ・短い時間だが構成的グループエンカウンターをやってみた。(ショートエクササイズ)

② Q-Uの2回目実施(11月)についての事例検討会<12月中に支援>

6月と11月の結果を比較し、プロット位置が大きく変化した児童について矢印を記入したものを教育相談課員が用意し、事例検討会を行った(図15、図16)。

まず、2回目の結果から、11月の学級集団の状態と気がかりな児童について話した後、1回目と2回目のプロット図を比較して、9月からの3ヶ月間の取り組みの成果について話し合った。学級の雰囲気や和やかになってきたと担任が感じていたことを裏付けるように、取り組み後は、プロットの位置が満足群へ凝集していた。教科担任からも、クラスの雰囲気や授業への取り組みが良くなってきていると報告があった。矢印を記入したことで、学級集団だけでなく大きく変化した児童にも気付きやすくなった。下向きの矢印になった気がかりな児童も見られたが、学年で事例検討会をもつことで、様々な助言を得られるため、担任はただ不安になるのではなく、心に少し余裕をもって多面的にとらえることができた。

2回のQ-U実施および学年の事例検討会の支援を通して、担任からは、「自分が把握している学級の状態と子どもたちの気持ちとの間にズレがないかを確認するという観点から分析することで、学級の困った状態にも前向きに取り組もうという気持ちになれた」「客観的に学級の状態を確認することができたので、効果的でないとわかった指導はすぐに修正することができるようになった」と意欲的な声があった。担任以外の教員からも、「複数回実施したことで、指導や支援の方法を変えた後の成果を客観的に確認することができてよかった」「Q-Uの結果を使って学年で話し合う大切さを実感できた」といった声があった。

今回の実践から、要請訪問研修による支援は、教員の「望ましい人間関係づくり」を意図した学級集団づくりへの意欲を高めるだけでなく、教員自身が指導を振り返ったり、チーム対応の重要性を認識したりする効果があることが分かった。

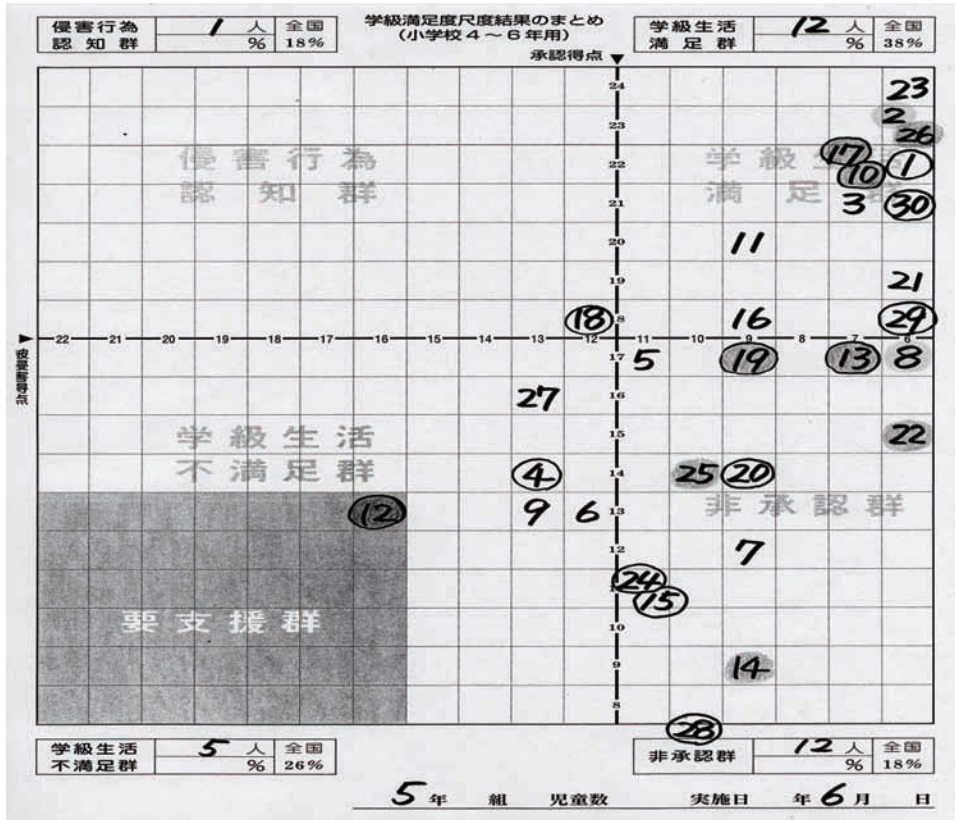
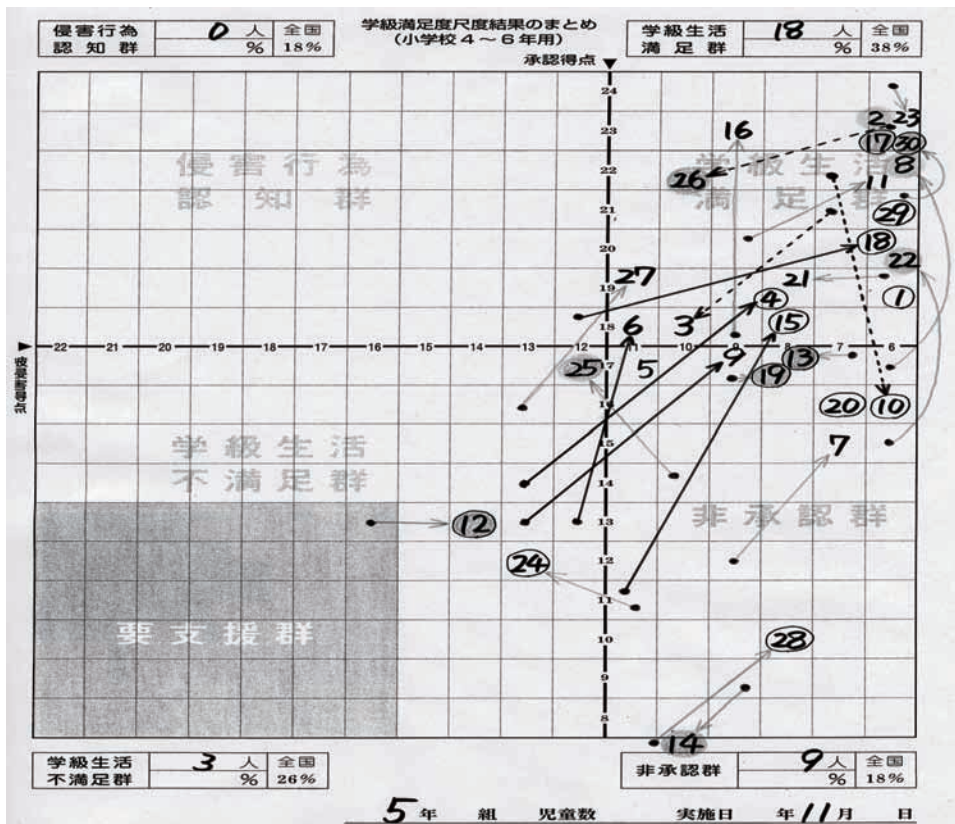


図10 Q-U 1回目のプロット図 (6月) ※河村茂雄『Q-U』図書文化社より引用



→ プロット位置の上昇した児童 - - - - - ↓ プロット位置の下降した児童

図11 Q-U 2回目のプロット図 (11月) ※河村茂雄『Q-U』図書文化社より引用

(2) 実践B（学校・教員共にQ-U実施の経験あり）

対象：中学校 全学年 全学級

参加者：同じ学年の担任(数名)、教科担任、養護教諭、支援員、SC、教育相談課員(3名)

Q-U実施回数：2回(6月、11月)

訪問回数：1回(12月)

学校からの依頼内容：

- ・Q-U結果についてのスーパーバイズ
- ・学年会での事例検討会の支援

<支援の経過>

校内の教職員の多くがQ-Uについての知識をもち、結果の分析や事例検討会の大切さを理解しているが、業務多忙のため、なかなか話し合いの時間がとれない現状での依頼だった。また、全学級にスーパーバイズしてほしいという希望もあった。そこで、短い時間で、より効果的により満足度の高い研修を工夫した。

通常Q-Uでの事例検討会では、K-13法を用い、1学級につき90分程度時間を必要とする。しかし、短い時間でできるだけたくさんの事例検討会を実施可能にするために、K-13法から抜粋し、30分程度のショートプログラムを考案した(図17)。このショートプログラムでは、学級をポジティブにとらえ、学年全体で担任を支え、学年担当教員の同僚性を高めることをねらいとした。

要請訪問研修を実施するに当たり、各担任から事前に「事例提供者の報告(図18)」を提出してもらい、それをもとに教育相談課員が「Q-U事例検討のためのコメントシート」に記入して提示した(図19)。学年での研修では、抽出されたクラスについて、下記のショートプログラムで事例検討会を行った。

<Q-U事例検討会：ショートプログラム 30分コース>

- 1 スーパーバイザーよりプレコメント(Q-Uの結果についてのスーパーバイズ) … 3分
- 2 担任よりポジティブポイントの報告1つ(学級の健闘しているところ) … 3分
- 3 ポジティブポイントについて質疑応答 … 3分
- 4 担任よりネガティブポイントの報告1つ(学級の苦戦しているところ) … 3分
- 5 ネガティブポイントについて質疑応答 … 3分
- 6 ネガティブポイントについてリフレーミングコメント(付箋記入) … 3分
- 7 コメントのグループ分け … 3分
- 8 ネーミング … 3分
- 9 司会者によるまとめ(担任にエールを送る) … 3分
- 10 担任からのコメントと意思表示 … 3分

図17 Q-U事例検討会ショートプログラム

「抽出クラスだけでなく全学級についてもコメントしてほしい」という依頼を受け、抽出クラスの実例検討会の後、教育相談課員から残りの全クラスについてもスーパーバイズを行った。

研修後、担任からは「自分の学級の事例を提出することに少し抵抗があったが、先生方が一生懸命考えてくれ、対応について話し合うことができたことが嬉しかった。」「抽出クラスではなかったが、自分のクラスについてもコメントしてもらえたのが嬉しかった。」などの感想があった。また、担任でない教員からは「今まで一人ひとりがそれぞれに頑張ってきたが、事例検討会を通して話し合うことで、共通理解・共通認識がすすみ、学年が一つにまとまるきっかけとなった。」「事例検討会を通して、他の先生達から担任への励ましや勇気づけをすることができた。」といった感想が聞かれた。

学年での研修は、学年全体での生徒理解はもちろんであるが、それ以上に、頑張っているお互いの姿

を認め合い、学年の仲間意識やメンタルヘルスを高める効果があったと考えられる。

事例提供者(担任教師などの報告)		担任:	(月)	
学級集団の背景:	人数	人:男子	人(~ 番) 女子	人(~ 番)
・学校の特徴:				
・学級編成の状況(持ち上がり等):				
<問題と感していること>				
・				
・				
<学級の公的なリーダーの児童(番号と簡単な説明)>				
・				
・				
<学級で影響力の大きい陸で仕切るような児童(番号と簡単な説明)>				
・				
・				
<態度や行動が気になる児童(番号と簡単な説明)>				
・				
・				
・				
<プロットの位置が教師の日常観察からは疑問に感じる児童(番号と簡単な説明)>				
・				
・				
<学級内の小グループを形成する児童(番号と簡単な説明)>				
・				
・				
・				
<4群にプロットされた児童に共通する特徴>				
満足群・・・・				
非承認群・・・・				
侵害行為認知群・・・・				
不満足群・・・・				
<担任の方針>				
学級経営・・・・				
授業の展開・・・・				

図18 事例提供者の報告

※河村茂雄『Q-U』図書文化社より引用

Q-U事例検討のためのコメントシート
<プロット図から浮かぶクラスのイメージ>
<input type="text"/>
<ルールについて>
<input type="text"/>
<リレーションについて>
<input type="text"/>
<子どもらがくじけているもの、勇気づけたいもの>
<input type="text"/>
<先生がくじけているもの、勇気づけたいもの>
<input type="text"/>
<その他>
<input type="text"/>

図19 Q-U事例検討のためのコメントシート

今回の実践で行ったショートプログラムでの事例検討会の利点は、なんといっても短時間で実施できるということである。このことは、忙しい教員でも学年での研修がもちやすくなり、学級集団理解を深める援助となるのではないかと考えられる。さらに、ポジティブポイントとネガティブポイントの報告を1つずつに絞ることで、課題が焦点化され、学級の状態が参加者にとって理解しやすくなるという利点もある。それぞれの学級への対応が明確化されることで、チーム対応が可能になり、ひいては「望ましい人間関係づくり」をすすめることができるようになると言えるだろう。

V 研究のまとめと今後の課題

今回の研究から、「望ましい人間関係づくり」を意図した学級集団づくりをすすめるためには、Q-Uを活用し、教員や学校のニーズに合わせ様々な形態の研修を支援していくことが、有効な手立てとなることが分かった。

Q-Uについての認知度や理解度は個人差が大きく、教員のニーズも様々であることが分かった。より多くの教員がQ-Uについて一般的な理解を深めるために、教育研究所での研修講座が、今後も大きな役割を担っていくと考えられる。

また、今年度は数多くの要請訪問研修を実施した。教育研究所の研修講座に参加することが難しい教員にとって、要請訪問研修は、学校の実情に合わせ、短時間で分かりやすく学校や学年全体で研修することができるという大きなメリットがあった。実際、多くの要請訪問研修を通じて、Q-Uについての

研修を支援することは「望ましい人間関係づくり」の支援になるだけでなく、その学校や学年の教員の同僚性を高める効果が大いことがわかった。同僚性が高まると、教員間の情報やスキルの共有化を図ることができ、チームによる児童・生徒への支援が可能になる。このことによって、学校や学年全体が望ましい教員集団になっていくものと思われる。

今後さらに「望ましい人間関係づくり」の支援を充実させていくために、多忙な学校の様々なニーズに応えていく必要があるだろう。そのために、教育研究所での研修講座を始め、要請訪問研修の方法や内容などのより一層の工夫が望まれる。

<謝辞>

最後に、本研究の実施にあたり、アンケートにご協力くださいました研修講座受講者の方々に厚くお礼を申し上げます。また、ご多忙の中、多大なご協力を賜りました研究協力校、研究協力員をはじめ、教職員の方々に心から感謝申し上げます。

《引用文献》

○河村茂雄『Q-U(楽しい学校生活を送るためのアンケート)』図書文化社

《参考文献》

- 河村茂雄(2007)『学級づくりのためのQ-U入門』図書文化社
- 河村茂雄(2000)『Q-U満足度尺度による学級経営コンサルテーション・ガイド』図書文化
- 河村茂雄他(2001)『グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム』図書文化社
- 河村茂雄他(2009)『Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド』図書文化社
- 桑名市教育委員会(2007)『不登校の未然防止』